

[_{DP}[indefinite-DP's][_{D'}[NP]]] 型名詞句の 解釈について

増 富 和 浩

1. はじめに
2. OMB タイプの名詞句の解釈について
3. OMB タイプ名詞句に関する解釈のメカニズム
4. OBM タイプの名詞句の解釈について：ミニマリスト統語論的分析
5. 結び

1. はじめに

本論文では、英語名詞句のうち、*an old man's book* のように、その指定部位置に不定名詞句を埋め込んだ形式を持つ英語名詞句の解釈について考察する。便宜上、本稿ではこれらの名詞句を *an old man's book* (OMB) タイプの名詞句と呼ぶことにする。

名詞句が受ける解釈は、いわゆる定・不定の解釈に大きく二分されるが、それらの解釈は主に、名詞句の指定部位置に生起する限定詞類の種類によって決定される¹⁾。定冠詞、指示代名詞、名詞・代名詞の属格（所有格）形などの定限定詞類が生起する名詞句の場合には、定の解釈が与えられ、不定冠詞、*some* などの不定代名詞、数詞が生起する名詞句や無冠詞（複数形）の名詞句は、不定の解釈が与えられる。従って、例えば *a children's book* という名詞句の解釈は、特別な文脈がない限り、「何か特定の本」を示しているのではなく、「不特定のこども向けの本」（あるいは、不特定のこどもが所有している本）を示していると考えられる²⁾。

しかしながら、同様の名詞句であっても、例えば、*an old man's book* などの OMB タイプの名詞句の中には、個々の言語表現において、定名詞句として解釈されていると考えられる事例が多く存在するのも事実である（詳細は次節以降の議論、および *Woisetschlaeger* (1983)、*池内* (1985) などを参照のこと）。ここで興味深いのは、不定名詞句である *an old man* も、全体の中心となる主要部名詞の *book* 自体も特定の指示物を示していないが、*an old man's book* 全体としては定名詞句として解釈されるという点である³⁾。このように、一見すると不定名詞句と考えられる例が、どのようにして定の解釈を受けるのかという点は非常に興味深いと考えられるが、本稿ではそのメカニズムについて生成文法の枠組みで考察することにする。

本稿の構成は以下の通りである。次節で、OMB タイプの名詞句の解釈についての主な先行研究

の議論を概観し、これらの名詞句が定名詞句として解釈されることを支持する言語事実を確認する。3節では、従来提案されてきた分析を検証し、その問題点を指摘する。4節では、ミニマリスト・プログラムの観点からの新たな分析を示し、その分析が、増富（2012, 2013, 2014）によって議論された英語名詞句の内部構造と名詞句の解釈、および移動との関係についての分析を支持することを議論する。

2. OMB タイプの名詞句の解釈について

本節では、すでに述べたような *an old man's book* などの OMB タイプの名詞句の解釈について、実例に基づいて概観してみることにする。まず、これらの名詞句の解釈は、下記の例が示すような事実に基づいて、曖昧である（つまり、定と不定の両方に解釈される）との指摘がある（Hornstein (1977)などを参照）。最初に、OMB タイプの名詞句が不定の解釈を持つとされる例を検討するが、その準備として (1) の例を確認しておくことにする。*there* 構文は、ある談話において、聞き手にとっての新情報を導入するために用いられるため、その意味上の主語 (*there is/are NP* の NP) は、(1a, b) の例が示すように、不定名詞句に限られ、定名詞句は許されないと分析されている。このような名詞句の生起に課せられる制限は、定性制限 (*definiteness restriction*) と呼ばれ、*there* 構文における文法性の違いを説明している。

- (1) a. *There is a dog/two dogs/some dogs/many dogs in the garden.*
b. **There is the/that/his dog in the garden.* (「*」は非文法的であることを示す。)

この点に基づいて見ると、(2) の *there* 構文においても、意味上の主語 *proof* が不定冠詞を伴う (a) の例は文法的で、定冠詞を伴う (b) の例は非文法的であることが理解できる。一方、*proof* を *a well-known mathematician's* という不定名詞句の属格が修飾する OMB (*an old man's book*) タイプの名詞句が意味上の主語となっている (c) の例が文法的であるという事実から、このような例における OMB タイプの名詞句の解釈は不定の解釈であると議論されている。

- (2) a. *There is a proof of the theorem by a well-known mathematician on page 642.*
b. **There is the proof of the theorem by a well-known mathematician on page 642.*
c. *There is a well-known mathematician's proof of the theorem on page 642.*

次に、OMB タイプの名詞句の解釈が定の解釈であることを示す例も観察されている。*destruction* のような出来事解釈を表す名詞 (*event nominal*) は、不定冠詞と共起しないとされている (Grimshaw (1990))。従って、(3a) の例は不定冠詞を伴っているのが非文法的であり、定冠詞を伴っている (3b) の例は文法的であると考えられる。その観点から言えば、(c) の例が文法的であるということは、*a hurricane's destruction* のような OMB タイプの名詞句は、定冠詞を伴う場合と

同様に、定の解釈を受けていることが分かる。

- (3) a. *a destruction of San Clemente by a hurricane
b. the destruction of San Clemente by a hurricane
c. a hurricane's destruction of San Clemente

従って、以上の例が示す文法性から考えると、OMB タイプの名詞句は、定と不定の両方に解釈される可能性があることが推測される。

一方、Woisetschlaeger (1983) や池内 (1985) などは OMB タイプの名詞句の解釈は、定の解釈のみであると主張している。下記 (4) の (a)~(c) の例が示すように、similar などの定冠詞と共起しない形容詞を伴う環境で、OMB タイプの名詞句を使用すると、(d)~(f) の例が示すように、非文法的となることから、これらの OMB タイプの名詞は定冠詞と同様に定の解釈を受けていると分析されている。

- (4) a. An/*The *unusual* news report by a Greek team revealed the full extent to which political reality and political rhetoric had diverged.
b. A/*The *bran-new* invention by a retired mailman looks to me as though it might be the answer to all our prayers.
c. A/*The *similar* investigation by a government agency uncovered no new evidence.
d. *A Greek team's *unusual* news report revealed the full extent to which political reality and political rhetoric had diverged.
e. *A retired mailman's *bran-new* invention looks to me as though it might be the answer to all our prayers.
f. *A government agency's *similar* investigation uncovered no new evidence.

逆に、(5) の (a)~(c) の例のように、only など定冠詞との共起を求める形容詞を用いた場合には、(d)~(f) の例が示すように、OMB タイプの名詞句とこれらの形容詞との共起が可能であることから、上の例と同様に、OMB タイプの名詞句の解釈が定であることが指摘されている⁴⁾。

- (5) a. The/?a *final* news report by a Greek team confirmed our worst fears.
b. The/*an *only* invention ever by a retired mailman turned out to be just the thing people had been waiting for.
c. The/an *initial* investigation by a government agency had led nowhere.
d. A Greek team's *final* news report confirmed our worst fears.
e. A retired mailman's *only* invention ever turned out to be just the thing people had been waiting for.

f. A government agency's initial investigation had led nowhere.

以上の観察をまとめると、OMB タイプの名詞句が定の解釈を受けることは明らかであるが、Hornstein (1977) などが指摘するような不定の解釈があるかどうかの問題である。この点に関しては、OMB タイプの名詞句が不定の解釈を持つとする論拠となっている *there* 構文における定性制限について、さらに見ておく必要があるであろう。すでに言及したように、定性制限に従えば、*there* 構文には定名詞句は生起できないが、次の例が示すように、その生起が可能な場合が観察されている。

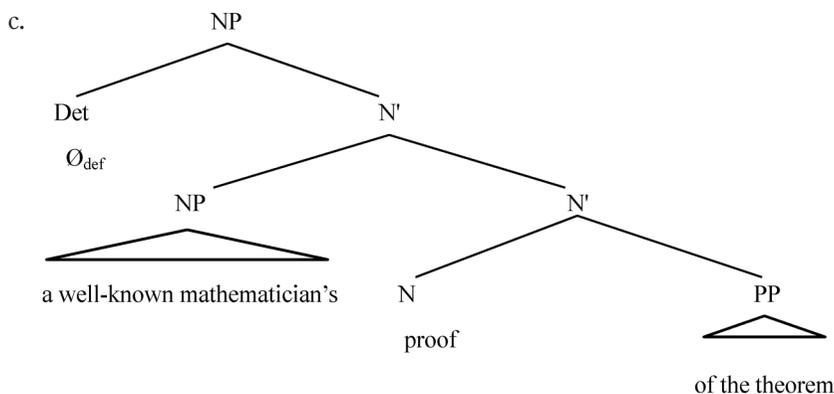
- (6) a. There was *the* vigor of a young man in his step.
b. There was a vigor of a young man in his step.

このような例も考慮に入れると、*there* 構文に生起可能であるかどうかという点と、問題となる名詞句の解釈が定あるいは不定であるかという点は、直接的な関係はないと考えるのが妥当であろう⁵⁾。従って、本稿では、Woisetschlaeger (1983) や池内 (1985) の指摘を支持し、OMB タイプの名詞句の解釈は定であるとして議論を進めることにする。ただし、すでに述べたように、*an old man's book* のような OMB タイプの名詞句には定冠詞等の定の解釈を導く要素が生起していないので、いかにして定の解釈が付与されるのかという点は興味深い。次節以降では、この点に注目し、OMB タイプの名詞句に定の解釈が付与されるメカニズムについて議論することにする。

3. OMB タイプ名詞句に関する解釈のメカニズム

本節では、前述の議論を踏まえ、OMB タイプの名詞句に定の解釈が付与されるメカニズムについて、その内部構造に注目し、統語論の観点から議論することにする。生成文法においては、個々の言語表現の解釈は、統語部門と意味部門との連携により決定され、統語部門で構築された言語表現ごとの(統語)構造に基づいて、意味部門でその解釈が決定されると説明されている。そのような観点から、Woisetschlaeger (1983) は、以下の (a) の例に生起している *a well-known mathematician's proof of the theorem* のような OMB タイプの名詞句を含む言語表現の内部構造は (b) のようであると説明している。また、(b) の構造を樹形図によって表せば、(c) のようである(以下の議論では、紙面の都合上、樹形図とラベル付カッコ表示を適宜使い分けることにする)⁶⁾。

- (7) a. There is a well-known mathematician's proof of theorem on page 642.
b. $[_{NP}[_{Det} \emptyset] [_{N}[_{NP} \text{a well-known mathematician's}] [_{N} \text{proof of the theorem}]]]$



(7) の (b) および (c) の構造において、Woisetschlaeger (1983) は、NP (noun phrase) の指定部位置に音形を持たない（つまり、語形上のゼロ形 (\emptyset) の) 定限定詞 ($[_{Det} \emptyset_{def}]$) を仮定している。Woisetschlaeger はこのような音形を持たないが、the に相当する解釈を持つ要素の存在により、OMB タイプの名詞句が定の解釈を付与されることを説明している⁷⁾。

一方、池内 (1985) は、an old man's book が the book that an old man has の解釈であることに注目して、an old man's book のような OMB タイプの名詞句は、(その内部に) 後方照応の定冠詞 the を伴っていると指摘している。後方照応の the とは、その指示対象がすでに行われた談話の中で同定可能である前方照応の場合 (下の (a) の例) とは異なり、初めて導入された the + 名詞の指示対象が、後続する談話情報において、話者と聴者との関係において認知されるか ((b) の例)、あるいは、発話の進行中に同定可能な指示対象物が明らかとなる場合である ((c) の例)。

(8) a. Fred bought me *some water*, but *the water* was dirty. (前方照応の用法)

b. A: What's wrong with Bill?

B: Oh, he's fed up with *the book* which *I've just given him for his birthday*. (後方照応の用法)

c. Will you go and get me *the box* (that is) *over there in the far left-hand corner*? (後方照応の用法)

(池内 (1985))

つまり、池内の分析では、an old man's book の場合には、その解釈が the book that an old man has であるとする、指示対象となる本は、談話の場面で認知可能となる老人が所有している本であると説明している。従って、Woisetschlaeger (1983) の主張とは若干異なるが、池内 (1985) においても音形のない後方照応の定冠詞が an old man's book のような OMB タイプの名詞句の内部に想定されていることになる。

以上のように、Woisetschlaeger (1983) や池内 (1985) の分析では、音形のない定限定詞を仮定することにより、OMB タイプの名詞句が定の解釈を受ける事実を説明できるとしているが、音形のない定冠詞などの要素を仮定する場合には、実際の言語現象 (言語表現) に現れる論拠を示す方が望ましいと考えられる。そこで、次節では、そのような点を含めて、本稿の提案する代案を示す

ことにする。

4. OBM タイプの名詞句の解釈について：ミニマリスト統語論的分析

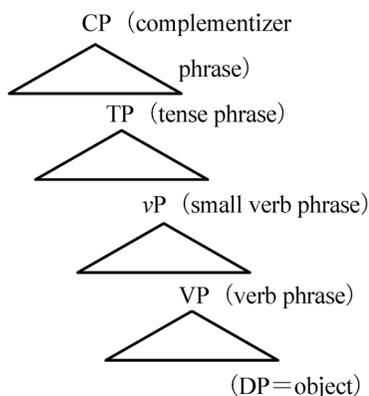
前節までに、OMB タイプの名詞句の解釈について、先行研究の分析をもとに経験的な事実について検討し、OMB タイプの解釈が定名詞句と同様の解釈であることを確認した。しかしながら、an old man's book のような名詞句は、見かけ上は不定冠詞に導かれた不定名詞句であり、the などの定限定詞類が含まれないため、どのようなメカニズムにより全体として定の解釈が付与されるのかについては検討の余地があることも確認した。また、問題となる解釈のメカニズムが、仮に Woisetschlaeger (1983) や池内 (1985) が提案するように、音形 (語形) を持たない定の解釈を持つ要素を仮定することで説明されるとしても、そのような仮定の妥当性についての議論が必要となることを指摘した。

そこで、この節では最新の統語論の枠組みであるミニマリスト・プログラム (Chomsky (2000, 2001, 2004, 2008)) の観点から、OMB タイプの名詞句の内部構造とその派生過程を考察することにより、上述の解釈メカニズムについて議論することにする。

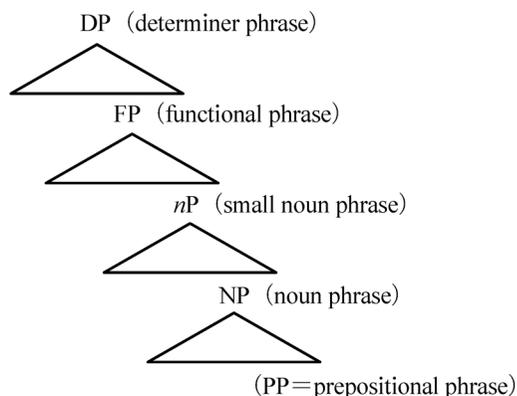
4.1. 名詞句の内部構造と派生過程について

まず、議論の前提として、基本的な名詞句の内部構造とその派生過程について確認しておくことにする。Abney (1987) 以降、節と名詞句との構造的並行性が具体的に示されるようになった。さらに、Radford (2000, 2004) などによる NP シェル構造の導入により、名詞句の派生構造とその派生過程は、構造内に生起する統語範疇の違いを除けば、ほぼ節と同様に説明することが可能と考えられている。下記の名詞句の構造に含まれる FP (functional phrase) は、数などに関する一致を担う (例えば、two books/*book などの語形を決定する) 機能的な投射であると考えられ、具体的には数詞等が生起する NumP (number phrase) であると指摘する分析もあるが、さらなる議論が必要と考えられるので、本稿では特に必要のない限りこの点には立ち入らないことにする。

(9) a. 基本的な節の構造

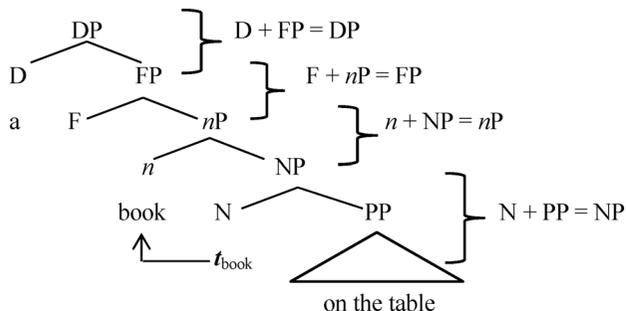


b. 基本的な名詞句の構造



このような構造に基づけば、例えば、a book on the table のような不定名詞句の内部構造とその派生過程は次のようである。(ただし、以下の議論では、説明を簡潔にするために、必要以上に詳細な技術的側面には立ち入らないことにする。)

(10) a.



(* 樹形図中の + は併合操作 (Merge) を示す。)

b. [_{DP} [_D a] [_{nP} [_n book] [_{NP} *t*_{book} [_{PP} on the table]]]]

(a) の樹形図表示と (b) のラベル付カッコ表示は同一の構造を示しているが、このような構造は、book と on the table 等の各構成素に対して、下位から上位へ向けて順に併合操作 (Merge) を加えることで形成される。ミニマリスト・プログラムにおいては、動詞句などの統語範疇は単独ではなく語彙範疇 (動詞句の場合は語彙的な動詞 V) と特定の語彙範疇を選択する機能的な特性を持つ要素 (動詞句の場合は軽動詞 *v*) とが結びつくことで形成されると考えられており、構造中の矢印はその際の移動 (動詞句の場合は V to *v* 移動、名詞句の場合は N to *n* 移動) を表している。

次節では、このような構造に基づいて、an old man's book のような OMB タイプの派生過程について議論することにする。

4.2. OMB タイプの名詞句の解釈と内部構造および派生過程との関係

本節では、前述の議論を踏まえて OMB タイプの名詞句の解釈と内部構造および派生課程との関係を議論することにする。まず、名詞句の解釈について一般的な特徴を確認することにする。

- (11) a. John wants to buy a car. (不定名詞句：非特定の解釈)
- b. John destroyed a window. (不定名詞句：特定の解釈)
- c. John bought the CD. (定名詞句：定の解釈)

名詞句の解釈は、話者と聴者が問題となる名詞句の指示対象物を同定できるかどうかという点から下記のように分類される。

(12)

	定名詞句	不定名詞句	
	定の解釈	特定の解釈	非特定の解釈
話者	+	+	-
聴者	+	-	-

(* 表中の+は指示物が同定可能、-は同定不可能であることを示す。)

定名詞句の解釈は、「定」であり、その名詞句によって談話中に導入された名詞（句）の指示対象が話者と聴者の両方にとって同定可能な場合である。従って、(11c) の例では、John が買った CD は話者と聴者の両方が知っていることになる。一方、不定名詞句の解釈には2通りあり、まず、行為の対象物の存在を前提とする *destroy* タイプの動詞を伴う (11b) のような例では、特定の解釈が付与され、話者は当然その指示物を分かっているが、聴者にとっては初めて聞く話であり、その指示対象は同定できない。次に、(11a) の例では、John がどのような車を買いたがっているかは（特定の文脈がなければ）話者と聴者には同定できず、これが非特定の解釈である。

本稿で議論している OMB タイプの名詞句は、音形の点からは不定名詞句であるが、解釈の点では定の解釈を持つと分析されているが (Woisetschlaeger (1983) や池内 (1985))、上のような分類を踏まえて考えると、不定名詞句の形態でありながら、定名詞句に近い意味特性を有するという点で、「特定の解釈」を付与されていると考える方がより妥当ではないだろうか。

ここで、特定のおよび非特定の解釈を受ける不定名詞句の内部構造とその派生課程を確認することにする。この点に関して、増富 (2012, 2013, 2014) は次のように議論している。

(13) 不定名詞句の構造

a. 非特定の解釈を受ける名詞句の派生構造

$$[_{DP} [_{D} a] [_{nP} [_{N} N] [_{NP} t_N ((PP P DP))]]]$$

↑

b. 特定の解釈を受ける名詞句の派生構造

$$[_{DP} [_{D} a] [_{nP} Op_{DCS} [_{N} N] [_{NP} t_N ((PP P DP))]]]$$

↑

(a) と (b) の構造の違いは、*nP* の指定部位置に談話情報を導入すると仮定される Discourse Operator (Op_{DCS}) が生起しているかどうかの違いである⁸⁾。特定の解釈を受ける不定名詞句の場合、すでに述べたように、談話に登場する指示物が話者には同定可能であるという点で、その情報と統語構造とを結びつける仕組みが必要となるが、その役割をこの演算子 (Operator) が担っていると考えることができるであろう。なお、特定の名詞句にこのような Op を導入する論拠として、池内 (1985) が指摘しているように、例えば、John wants to meet a girl における不定名詞句 a girl は、談話の文脈により、特定・非特定の両方に解釈可能であるが、このような解釈の曖昧性は、*certain* や *particular* などの形容詞を用いて、a certain girl などとすることで解消することが可能である

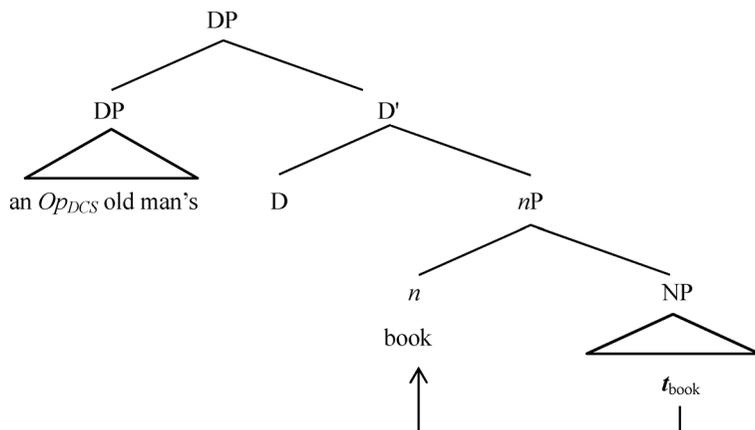
(つまり、a certain girl は「ある特定の少女」という解釈のみである)。このような事実を踏まえ、certain などの音形を持った語彙項目が生起しない場合にも、名詞句に特定の解釈が適用される場合には、これらの形容詞に相当する要素として、Op_{DSC} を想定する必要があると考えることは、論理的に可能であろう。

このような提案を踏まえて考えると、本稿で議論している OMB タイプの名詞句の内部構造と派生過程は次のようであると考えられることができる。(なお、下の内部構造および派生過程に関しては、説明を簡潔にするために、現在の議論に関係しない点については、適宜省略等を行っているので、詳細については、増富 (2012, 2013, 2014) などを参照のこと。)

(14) a. an old man's book

b. [_{DP} [_{DP} [_D an] [_{nP} Op_{DSC} old [_n man] [_{NP} t_{man}]]]]'s D [_{D'} [_{nP} [_n book] [_{NP} t_{book}]]]]

c.



上記の構造について確認すると、最上位の DP の指定部位置に本稿で言及した Op_{DSC} が生起しているという点が重要である。つまり、Op_{DSC} を含み、特定の解釈を受ける不定名詞句 [_{DP} an Op_{DSC} old man] が、an old man's book という OMB タイプの名詞句の解釈の決定に重要な役割を果たし、この名詞句全体の解釈の特定性を決定していると説明できるのである。本稿では、このような派生のメカニズムを考えることで、従来議論されてきた OMB タイプの名詞句の解釈は、特定の解釈であると提案する。

最後に、本稿での提案を支持する論拠として、次のような言語現象が存在することを確認しておくことにする。

(15) a. Who did you see [_{DP} a portrait of t_{who}]? (非特定の解釈の不定名詞句)

b. *Who did you destroy [_{DP} a Op_{DSC} portrait of t_{who}]? (特定の解釈の不定名詞句)

c. *Who did you see [_{DP} the portrait of t_{who}]? (定名詞句)

これらの例は、定・不定名詞句からの要素の移動（疑問化）に関する文法性を示している。一般に、不定名詞句からの要素の移動は可能であるが、定名詞句および特定のな解釈を受ける不定名詞句からの要素の移動は不可能であるとされている（Fiengo and Higginbotham (1981)、大庭 (1999) など）。つまり、(b)、(c) の例から、これら二つの名詞句は統語的に極めて近い特性を有しているということがわかる。このような言語事実から考えて、本稿では、OMB タイプの名詞句は、不定名詞句の解釈のうち、定名詞句の解釈に近いと考えられる「特定のな解釈」を受けていると提案しているのである。より厳密に言えば、an old man's book などにおいて特定のな解釈を引き出しているのは、この名詞句の主要部名詞 book の前に生起している不定名詞句 an old man であると考えられる。

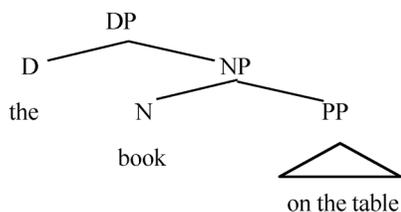
5. 結び

本稿では、an old man's book (OMB) タイプの名詞句が有する解釈について生成文法（ミニマリスト・プログラム）の観点から検討した。上述の議論において、このタイプの名詞句が音形上は不定名詞句であるにもかかわらず、定名詞句として解釈されるという興味深い分析について、事例に基づいて再検討した結果、これらの名詞句が有する意味特性は、統語特性の点から考えて、「定性」ではなく、「特定性」として説明することが妥当であることを提案した。また、議論の過程で、OMB タイプの名詞句の内部構造とその派生過程についても新たな提案を行った。

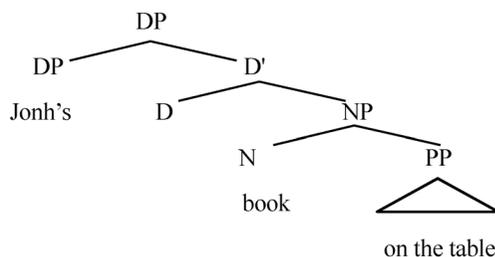
注

- 1) 指定部位置とは、それぞれの句や節の構造において、その中心をなす主要部の前の位置を指す。a/the book などの名詞句の場合には、a/the などの冠詞が占める位置に相当し、John bought a book などの節(文)構造の場合には、主語が占める位置などのことである。
- 2) a children's book は、一見 OMB タイプの名詞句に似ているが、単に不定名詞句であると分析すべきである。この点については、注 7 も参照のこと。
- 3) Woisetschlaeger (1983) によれば、定性の解釈を持つのは、an old man's の部分であるが、3 節で言及するように、そのメカニズムは検討の余地がある。
- 4) (5c) の例は定冠詞と不定冠詞の両方と共起可能であるが、定冠詞の場合と不定冠詞の場合で全体の解釈が異なることに注意したい。つまり、定冠詞を伴う場合は「政府機関によって行われた調査が複数あり、その最初の調査」という解釈で、不定冠詞を伴う場合は「複数の調査があり、そのうちの最初の調査が政府機関によって行われた」という解釈である。なお、(f) の例の解釈は前者の解釈のみである（Woisetschlaeger (1983)）。
- 5) なお、定性制限によって説明されてきた there 構文と定名詞句が一見共起できないと思える多くの例については、語用論等の別の角度から説明される可能性が高いと指摘しておく。
- 6) Woisetschlaeger (1983) の議論では、その後に提案された (i) および (ii) に示すような Abney (1987) の DP 分析を使用することができないので、構造全体は NP (noun phrase) となっている。

(i) the book on the table



(ii) John's book on the table



また、理論上不適切ではないが、(7b)、(7c)においては、NPの指定部レベルではなく、中間投射であるN'のレベルが多重構造となっていることは注目される。

- 7) Woisetschlaeger (1983) は、また、一見 OMB タイプ思える a children's book のような名詞句についてもその構造を議論している。an old man's book の場合とは異なり、a children's book は「数」の一致の観点から、不定冠詞の a は、children ではなく、この名詞句の主要部である book と関連づけられることは明白である。従って、不定冠詞の a は children と一体を成しているわけではなく、単独で book を修飾する構造を構築し、その内部構造は、(iii) のようであると説明している。

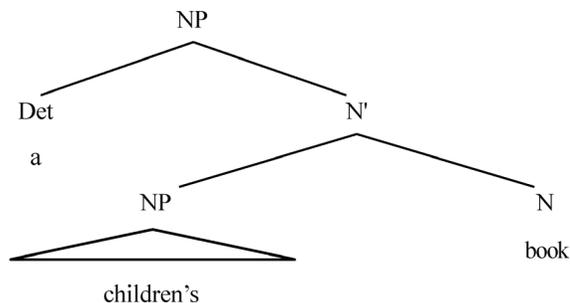
(i) [an old man's] book



(ii) a [children's] book



(iii) a children's book:



- 8) 厳密に言えば、指定部位置に要素を有する軽名詞句は、 n^*P と表記すべきであるが、本稿の議論には特に影響がないため、ここでは nP のまま表記することにする。その他、(13) の構造についての詳細は、増富 (2012, 2013, 2014) などを参照のこと。

参考文献

Abney, Steven Paul (1987) *The English Noun Phrases in Its Sentential Aspect*, Doctoral dissertation, MIT.

Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 98–155, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT

- Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2004) “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, Volume 3, ed. by Adriana Belletti, 104–131, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freiden, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizatteta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Fiengo, Robert and James Higginbotham (1981) “Opacity in NP,” *Linguistic Inquiry* 18, 163–171.
- Hornstein, Norbert (1977) “S and the X' Convention,” *Linguistic Analysis* 3.2, 137–176.
- 池内 (1985) 『名詞句の限定表現—新文法選書 6—』, 大修館書店, 東京.
- 増富和浩 (2012) 「(不)定名詞句の内部構造について：the + 形容詞の名詞性からの一考察」『ことばとこころの研究』, 大橋浩他(編), 163–176, 開拓社, 東京.
- 増富和浩 (2013) 「(非)特定性を生じる名詞句の構造についての一考察：談話とのインターフェイスを視野に入れて」『言語学からの眺望 2013』, 福岡言語学会編, 336–348, 九州大学出版会, 福岡.
- 増富和浩 (2014) 「談話(D)連結 wh 句の統語特性とその内部構造の関係について」『日本英文学会九州支部第 66 回大会 Proceedings』, 321–322.
- 宗正佳啓 (2010) 「名詞句からの Wh 移動」『福岡工業大学研究論集』, vol. 43, 21–26.
- 西岡宣明 (2007) 『英語否定文の統語論研究—素性照合と介在効果—』, くろしお出版, 東京.
- 大庭幸男 (1999) 「Phase としての名詞句表現」『言語研究の潮流—山本和之教授退官記念論文集—』, 稲田俊明(編), 21–36, 開拓社, 東京.
- Radford, Andrew (2000) “NP-shells,” *Essex Research Report in Linguistics* 33, 2–20.
- Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Woisetschlaeger, Erich (1983) “On the Question of Definiteness in ‘An Old Man’s Book,’” *Linguistic Inquiry* 14, 137–154, MIT Press, Cambridge, MA.

On the Interpretation of [_{DP} [indefinite-DP's][_{D'}[NP]]]-type Noun Phrases

MASUTOMI Kazuhiro

The goal of this paper is to explore the interpretation of the [_{DP} [indefinite-DP's][_{D'}[NP]]]-type Noun Phrases, like *an old man's book*, within the framework of the Minimalist Program, which is proposed by Chomsky (2000, 2001, 2004 and 2008 among others). Consequently, I examine the relationship between the structure and the meaning of this type of noun phrases on the basis of the analysis proposed by Abney (1987)'s Determiner Phrase (DP) analysis. In the course of the discussion, I also discuss the mechanism which generates the definite reading of this type of noun phrases and propose a special element which occurs in the relevant structure (i.e. Discourse Operator: *Op_{DISC}*). Such an analysis should have some implication for the interface theory between syntax, semantics and pragmatics.

